

表 2-6(3) 春季事後調査日における稼働建設機械



写真 C-1 バックホウ



写真 C-2 トラッククレーン



写真 C-3 ラフタークレーン



写真 C-4 ラフタークレーン

表 2-6(4) 繁殖期事後調査日における稼働建設機械

	
<p>D-1 ラフタークレーン</p>	<p>D-2 ラフタークレーン</p>
	
<p>D-3 高所作業車</p>	<p>D-4 ラフタークレーン</p>
	
<p>D-5 高所作業車</p>	<p>D-6 ラフタークレーン</p>

表 2-6(5) 夏季事後調査日における稼働建設機械



3.2 予測結果と事後調査の結果との比較検討

(1) 予測した事項

1) 工事の施工中での工事及び計画路線の設置による陸上動物（鳥類）の変化の程度

予測結果（平成5年提出評価書）では、「建設機械の稼働に伴い、陸鳥類の生息場所である草地は急激に改変され、工事期間中は、生息環境の安定は望めないため、工事区域周辺の生息地は失われることとなる。また、水鳥類の利用する水域は、大きな改変を受けないものの、工事区域周辺の生息地は減少する。」としている。

評価書と事後調査における鳥類の出現状況は、表 2-1 に示すとおりである。陸上生物（鳥類）のうち、草地などの開けた場所を生息環境とするセッカ、ハヤブサ及びチョウゲンボウについては、現況調査時及び事後調査時ともに確認されたが、オオヨシキリ、オオジシキ及びチュウヒについては、事後調査では確認されなかった。これは、現況調査時点では、草本群落が自然繁茂した造成地が多かったのに対し、事後調査時点では、本事業以外にもその他周辺開発が行われていたことによりこれらの草地が減少したことが一因と考えられる。

水域を生息環境とするカモ類、カモメ類、干潟を生息環境とするシギ・チドリ類については、事後調査においても確認されたものの、確認種数は現況調査時より減少した。評価書においては「水鳥類では、有明貯木場北側の防波堤周辺を生活の場としているものについては、事業による影響を受けることとなるが、カモ類、カモメ類等の水面利用種については、調査地域周辺に広く生息域が残されており、影響は少ないと考えられる。また、近年個体数が減少しているシギ、チドリ類については、計画路線が位置する有明貯木場には生息に適した干潟はなく、影響は少ないと考えられる。」と予測しているが、事後調査時点においては有明貯木場以外の地点でも護岸整備が進んでおり、それらの影響により水面や砂浜等の生息環境が減少したことが一因と考えられる。なお、事後調査計画書では、事業の影響範囲を勘案し、調査地点から中央防波堤内側埋立地を除外したことから、評価書において中央防波堤内側埋立地で確認されていたタシギやチュウシャクシギは、事後調査では確認できなかったものとする。

水域を生息環境とする種が減少した一方で、工事区域周辺の開発により、建築物外構や公園の植栽樹林及び緑地が新たに創出された。これらの植栽樹林を生息環境とするコゲラ、ヤマガラ、シジュウカラ、シロハラ等は現況調査時と比較して事後調査時に多く確認されるなど、生息環境の変化に対応した鳥類相となっていた。

なお、工事の施行中において、陸上動物にかかる苦情はなかった。